

地域情報（県別）

【東京】僧侶の経験を生かし「地域医療の隙間を埋めたい」-小笠原尚之・高輪往診クリニック院長に聞く◆Vol.2

供養や法事などを通じ、患者の死後も家族を継続支援

2025年7月7日 (月)配信 m3.com地域版

2025年5月に開院した「高輪往診クリニック」の小笠原尚之院長は、東京都港区の正源寺に診療スペースを設け、寺を拠点に在宅医療を行う全国的にも珍しい取り組みを始めた。勤務医時代に在宅医療の経験を積んだ小笠原氏が目指すのは、医療と仏教をつなぐ新しいスタイル。「僧侶である自分だからこそできる地域貢献を行っていきたい」と話す小笠原氏に、在宅医療を始めた経緯や開業医としての展望を聞いた。（2025年5月27日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



正源寺で合掌する小笠原尚之氏（本人提供）

——小笠原先生は2014年に久留米大学泌尿器科学講座に入局し、2018年に同大学院に進みます。どのような経緯で東京との縁ができたのですか。

大学院で研究していた頃、東京に住む外科医の妻と出会ったことが東京移住のきっかけです。私の次兄が港区にある浄土真宗本願寺派の「正源（しょうげん）寺」に婿入りして住職を務めており、彼からお見合いの話がありました。妻の父親が都内の開業医で墓を探しており、兄にも相談があったようです。相手は東京に住んでいますし、話をいただいた時はまさか結婚するとは思っていませんでした。しかし、お会いした時にフィーリングが合い、結婚までとんとんと話が進んだのです。

一方、大学院で研究に携わったことは医師としての転機でもありました。それまでは外来・手術・病棟管理などに忙しく、追われるように日々を過ごしていましたが、野球部の大先輩（現久留米大学副学長・同大環境医学講座教授の石竹達也先生）が主宰する大学院で臨床から離れたことにより、気持ちに若干の余裕ができました。「これからどうしていいか……」と自分の将来を考え、開業も頭に浮かぶようになって。妻と出会ったのはちょうどその頃で、2019年に結婚して翌年には子どもも生まれました。2021年に大学院を早期修了した後は同大泌尿器科の外来医長として病棟に勤務し、2023年3月に退職。東京に転居しました。

「寺の家に生まれたことが在宅医療に生きている」

——先生は泌尿器科医として臨床や研究に携わってきました。在宅医療はどのタイミングで経験したのですか。

東京に来てから勤めた「森島小児科内科クリニック」（神奈川県川崎市）です。こちらに勤務するまで在宅医療を行うイメージは頭になく、私の専門である泌尿器科で働ける医療機関を探していました。条件としては時短勤務で週に4日といったように、フレキシブルに働けることを希望していました。私と妻は結婚後もそれぞれ福岡と東京に住んでおり、月に1回ほど会う生活を送っていました。子どものことも3年にわたって妻と義理の両親に任せていたもので、東京に転居してからは子育てを中心に生活したかったんです。加えて、僧侶として兄の寺を手伝いたい思いもありました。「子育て」「僧侶」「医師」をバランスよく担えることを重視した結果、たまたま同院とのご縁を仲介業者の方からいただきました。

——森島小児科内科クリニックが、在宅医療も行っていたというわけですね。

そうです。森島昭院長は小児科が専門ですが、成人も対象に在宅医療を行っておられました。森島先生は50年以上にわたって開業医として地域医療に貢献され、過去に川崎市小児科医会の会長や神奈川小児科医会の副会長を務めただけでなく、数々の表彰も受けておられます。現在は30代の先生が医院を継承してクリニックの若返りが図られていますが、森島先生は今も同院で壮健に活躍されています。剣道、尺八、茶道などに親しみ、中でも剣道は60年以上研さんを積まれており、6段を有する達人。今も週に1度、診療後に道場で稽古に励まれていると聞きます。まさに、「文武両道」の存在です。

私は同院に入職後、森島先生と一緒に外来診療と在宅医療の両方を行いました。すると、すぐに感じるものがありました。「あ、これは私に向いているな」と。在宅医療は専門に特化した医療技術の高さだけでは不十分であり、全人的な医療が求められます。患者さんの生活背景やご自宅の様子、家族内で誰が主導権を握っているかなどを把握しながら患者さん・ご家族の希望と医療・介護のリソースをうまく調整していく必要があります。こうした特性に魅力を感じましたし、私自身、以前から患者さんにご家族の話をじっくりと聞きたい思いがあり、在宅医療と相性が良いと思いました。

——資料によると、「寺の家に生まれたことが在宅医療にも生きているのでは」とあります。

高齢の方とよく接していたことは、少なからず影響しているでしょう。私は幼少の頃から毎年、盆や年始などに他宗の檀家を意味する門徒さんのお宅にお参りに行っていました。少し年が経つとお経も唱えていました。相手の家に飛び込んで雑談を交わしながら法要を行うことに慣れていた面は、在宅医療に生きていると思います。

「寺の庫裏で開業してはどうか」兄の言葉で開業を決意

——その後、2025年5月にお兄さまが住職を務める正源寺内で「高輪往診クリニック」を開院します。

「寺の庫裏（くり）で開業してみてはどうか」と次兄から提案があったことがきっかけです。庫裏とは、寺院内における僧侶の居住空間を意味します。それまでも在宅クリニックの開業を考えたことはありましたが、子育て中心で同寺の副住職の仕事もしつつ、開業医も務められるのか……とためらいがありました。妻との出会いと同様、このときも機会を与えてくれたのは次兄の言葉でした。開業を決意したのは2024年12月で、それからは本当にバタバタの日々（笑）。子どもの保育園の送り迎えを毎日しつつ、僧侶の仕事と並行して開業に向けて準備し、何とか実現にこぎ着けました。次兄は現在もクリニックの総裁として院長の私を支えています。

患者の希望があれば供養や葬儀、墓の手配、法事も可能

——医師と僧侶を兼任する人はいるものの全国的に少なく、寺を拠点に在宅医療を行うケースはさらに珍しいと思います。今後の展望をお聞かせください。

「医療と仏教をつなぐ新しいスタイル」「地域医療の隙間を埋める取り組み」を模索していきたいですね。一般的に患者さんが亡くなった場合、医師とご家族の縁はぶつりと切れてしまいがちですが、有縁の人たちからすると、患者さ

んの死後も人生は続いていくわけで、愛おしい人のいない現実を生きていかねばなりません。こうした空白を西洋医学や在宅医療だけでつなげていくのは難しい。しかし、僧侶である私であれば、人間の生と死、死後の問題を一連の流れとして捉え、ご家族のサポートを継続していける可能性があると思います。

現実的に、ご家族から希望があれば供養や葬儀、お墓の手配、法事に関われますし、医師・僧侶として学んできた人生観や死生観に関するお話をさせていただくこともできます。地域に向けた活動としては、他の僧侶や医療関係者をゲストに招くなどして法話や講演会を開くのも一つの方法です。医師一人の小さなクリニックですが、これから出会っていく方一人一人とのご縁を大切に、誠実に、地道にやっていけば自ずと道は開かれていくように思います。



正源寺で法話を行う小笠原氏（本人提供）

◆小笠原 尚之（おがさわら・なおゆき）氏

2012年久留米大学医学部卒。2014年同大泌尿器科学講座入局。2021年同大大学院修了。2023年に森島小児科内科クリニック（神奈川県川崎市）で在宅医療を経験し、2025年に自身が副住職を務める正源寺に「高輪住診クリニック」（東京都港区）を開院。「医師×僧侶」の二刀流で地域医療に携わる。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

